第33回北前船寄港地フォーラム 第4回地域連携研究所大会 in OKAYAMA

国内各地を結び、世界へ発信する

～晴れの国・岡山から世界へ～

江戸・明治時代に日本の交易を担った「北前船」に関連する自治体や事業者が連携し、各地域の活性化や地域への貢献、国内外からの誘客に取り組んでいる。その旗振り役が「北前船交流拡大機構」（濵田健一郎理事長）だ。同取り組みをさらに拡大し、新たな局面へと展開していく「北前船寄港地フォーラム」の第33回大会が、10月６日に岡山県で開催された。「北前船と吉備の穴海～海と川が織りなした文化・産業～」のテーマのもと、各登壇者が取り組み事例や今後の展望を発表し、課題とその解決策を提示した。同機構の取り組みをより広域に伸張させ、さらに広大なネットワーク構築を目指し設立された地域連携研究所（同理事長）の第４回フォーラムも前日の５日に開催された。両フォーラムの内容を、各登壇者の講演を中心に振り返る。

10/5

第４回

地域連携研究所大会

秋田県大館市長
福原 淳嗣 氏

ハチ公生誕100年事業及び フランス・アルザスとの交流

今年4月、秋田県と東急が観光振興や脱炭素推進などで協力し、地域活性化を図るため包括連携協定を締結した背景には、忠犬ハチ公が縁となり深めてきた大館市と渋谷区とのつながりがある。忠犬ハチ公は大館市生まれ。渋谷区と大館市は毎年、それぞれで慰霊祭を行い、1990年代からはJR渋谷駅のハチ公前広場でハチ公フェアを開催するなど、活発に交流している。令和4年5月には、渋谷区・大館交流促進協定を締結し、観光・文化・産業・スポーツ等を通じた交流のさらなる深化を目指している。

コロナ禍や世界の軍事侵攻がわれわれに気付かせたこと、それは地域が持つ素晴らしい地域資源に目を向け、その強みを機軸に地域の力を高め、自分たちの住むところに誇りを持ち、未来の担い手に受け継ぐこと。そこで、大館の強みとは何か。周りを世界自然遺産「白神山地」、世界文化遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」、十和田八幡平国立公園に囲まれている。世界中の富裕層からの注目も集まり、観光庁が高付加価値旅行者の誘客に向けて集中的な支援等を行うモデル観光地域の一つとして八幡平エリアが選定された。

先日、ニューヨークタイムズ紙で取り上げられた盛岡市には、多くの欧米人が来訪している。その方たちに「次にどこへ行きたいですか」と尋ねると、「秋田犬に会いに行きたい」と答えるそう。弘前市への結節点となっている大館には交流拡大への大きな可能性がある。市内に目を向けると環境リサイクル産業の「同和ホールディングス」、医療機器メーカーの「ニプロ」、三菱重工によるロケット燃焼試験場など、世界とつながる企業の施設がある。空路では東京と70分で結ばれる大館能代空港がある。大館市は、未来を担う自然エネルギーや環境リサイクルの拠点となり、これらの環境・産業をベースに「秋田犬」という唯一無二の資源で国内外との連携を図っている。

海外との交流では、昨年のパリでの北前船寄港地フォーラムを機に、今年5月にベルギーのEU日本政府代表部や欧州委員会成長総局を訪問し、大館曲げわっぱを紹介した。この動きが来年4月に備前市と共同で出展するイタリアの「ミラノサローネ」につながった。同フォーラムを機にアルザス地域とのつながりも構築され、今年6月には同地域に本拠地を置くCEEJA（アルザス・欧州日本学研究所）に交流の証として秋田犬の特大ぬいぐるみを贈呈。2027年に同地域に開業する「ヨーロッパ漫画&アニメ博物館」のマスコットキャラクターを秋田犬とすることで、キャラクター募集や活用について来週、CEEJAと大館市は協定を結ぶ予定だ。

ハチ公がつむぐ「大館―渋谷」の縁を、ヨーロッパを舞台に未来を担う子どもたちのための交流にもつなげていきたい。

岡山県備前市長
吉村 武司 氏

地方創生の現場から

当市は昨年7月「荒波を超えた男たちの夢が紡いだ異空間　北前船寄港地・船主集落」の49番目の市に認定された。「特別史跡旧閑谷学校」「六古窯」としての備前焼に続く日本遺産の認定で、「三つの日本遺産がある文化のまち」として歩みだした。三つの日本遺産の関連施設を相互連携させ、観光需要喚起につなげたい。北前船については、北前船を模した観光船を建造する。現在、デザイン・建造の事業者も決定し、プロジェクトを着々と進行中だ。また、寄港ルートを再現した歴史ツアーや当地でしか味わえない魅力ある観光ルートを開設し、大阪・関西万博や瀬戸内国際芸術祭を契機に、国内外の誘客を促進し、地域活性化を図る。

ここで備前焼の魅力についての紹介を。約800年の伝統を持つ備前焼は、高い成形技術で作られた作品を約20日間の長い焼成時間を経て完成する。作品に付着した松割木の灰が高温で溶けた「胡麻」、作品が灰に埋もれ火が直接当たらずに焼成された「棧切り」等、多種の模様を形成し、一つとして同じものはない。その気品や重厚感が国内外から高く評価されながらも、国内市場は縮小傾向にあり、事業者の高齢化、後継者不足などの課題を抱える。その解決に向け、昨年のパリでの北前船寄港地フォーラムに参加するとともに、北前船交流拡大機構を通じた備前焼のPRに取り組んだ結果、欧州での販路拡大の重要性に一定の手応えを感じた。その一環として、市立備前焼ミュージアムの2025年のリニューアルオープンに伴い、パブロ・ピカソが作陶した陶器を収蔵する美術館を有するフランス・ヴァロリス市、イタリア・ファエンツァ市とともに、リニューアルオープン記念企画を見据え、作品の貸与等の文化的、人的な交流を進めるとの覚書「友好の書」を締結した。

現時点での備前焼の海外事業展開として、瀬戸内市と備前市、瀬戸内市伝統工芸美術品振興事業実行委員会」を発足し、フランスで開催された日本文化の総合博覧会「JAPANEXPO2023」に出展。各店舗が提供してくれた計116品は最終日までに完売、という盛況ぶりだった。今後はモナコで開催される展示会「Made in Japan in Monaco」への出展、フランスでの市場調査等を瀬戸内市と共同で行っていく。世界的な家具見本市「ミラノサローネ」には、秋田県大館市の「曲げわっぱ」との共同出展を計画している。ミラノサローネへの参加を通じ、備前焼の魅力発信や欧州での販路拡大を図るとともに、多くの作家に世界のトレンドを経験してもらい、備前焼の未来につなげていきたい。

これらの取り組みも、北前船に係る皆さまとのつながりが生み出したもの。今後の備前市の活動にもぜひ注目してほしい。

欧州連合日本政府代表部
参事官
二宮 悦郎 氏

"Art"を正しく売る

昨年のパリでの北前船寄港地フォーラムで北前船に関わる皆さまと出会い、「伝統工芸品や日本の文化をヨーロッパでもっと売っていくべきだ」と問題意識を持ち、EU代表部がハブとなり欧州市場での展開促進に注力している。伝統工芸品は内需が減少し、海外需要の取り込みが必須である。その点に関して非常に意欲的な職人さんが多くいるにも関わらず、海外市場への展開の仕方が分からない。しかし海外での日本文化へのニーズと考えると、「岡山の皆さんの岡山愛」だと思う。今回の岡山大会で、地域連携研究所と北前船交流拡大機構がどう発展していくのか、大いに期待している。（木下グループ代表取締役・木下直哉）

10/6

第33回

北前船寄港地フォーラム

岡山県岡山市長
大森 雅夫 氏

林原美術館館長
谷一 尚 氏

ロマンあふれる吉備の国

大森　2世紀から5世紀、特に5世紀は吉備と大和（現在の奈良県）の二頭政治だったと考えている。

鉄の流通拠点の一つが吉備（現在の岡山県と、広島県福山市辺りを含む地域）だった。豪族が集まり大和を大きくした時代、吉備に墳長139㍍の浦間茶臼山古墳（岡山市）が作られた。これは卑弥呼の墓とされる箸墓古墳（奈良県桜井市、墳長278㍍）のちょうど半分。ここに吉備と大和の婚姻関係が見られると考えている。また、5世紀前半の造山（ぞうやま）古墳（岡山市、墳長350㍍）と履中天皇陵（りちゅう）古墳（大阪府堺市、墳長360㍍）は、寸法も作り方も全く一緒。これはお互いにルールを作って築造したのではないかと考えられる。千足古墳（岡山市）内の直弧文（直線と円弧からなる特殊な文様）が描かれた石障（石の）ついたて）は天草（熊本）から取り寄せている。なぜわざわざ天草の石を吉備まで運んだのかと調べると、日本各地には吉備の系譜を引く国造（くにのみやつこ）が非常に多い。つまり大和朝廷と相談し、吉備の人間を現地に送る調整ができていたのではないだろうか。4世紀から6世紀までの天皇の近しい人物にも吉備の名が多く見られ、吉備と天皇との姻戚関係も非常に多い。以上から、古墳時代における吉備・大和の二頭政治の倭国論を提言したい。

谷一　千足古墳の直弧文が非常に特殊な模様で、長砂連古墳（熊本県上天草市）も同様に、非常に特殊な模様をしている点からも、大森市長の説明に納得していただけるのではないか。

――古墳時代、日本列島で同様の力を持つ吉備と大和という二大勢力が手を結んで倭国を運営していた点については。

谷一　一般的に知られる「魏志倭人伝」によると、大和と吉備の国力は日本列島の中で図抜けて大きな国力を持っていたとされている。

――温羅（伝承上の鬼で古代吉備の統治者であったとされる）伝説と吉備の負けが合わさり、吉備津彦が温羅を退治するという伝説になった。蘇我氏と吉備の仲が良かったがゆえに蘇我氏と一緒に歴史から抹殺されたという点についても大森市長から説明していただいた。

谷一　木簡には、「蘇我氏が大和朝廷から派遣され、吉備の財源であった塩や鉄などについて、大和朝廷が岡山に拠点を作って、そこから中央に運んでいた」という記録も残っている。

大森　岡山では、毎年夏に「うらじゃ」という祭りを行っている。顔にペイントをしてエネルギッシュに踊るものだが、これは温羅伝説に則っている。温羅は鬼ではないし、悪いものでもない。今日こういうイベントができるのも、歴史的な背景があるからだと感じる。

岡山県倉敷市長
伊東 香織 氏

北前船によって花開いた 現代へと続く倉敷の文化・産業

かつて倉敷一帯は「吉備の穴海」と呼ばれたが、約400年前に始まった干拓により陸地へと姿を変えた。塩分に強い綿やイグサが栽培され始め、倉敷の繊維産業の原点となった。同じころ、北前船が倉敷の玉島、下津井などの港に寄港し、問屋街で盛んに商売されるようになった。北前船はニシン粕や干鰯などの魚肥、昆布などをもたらしたが、倉敷で綿花栽培が盛んになったのは、北海道から運ばれたニシン粕が肥料として使われたから。綿、足袋や反物などの綿製品が全国に積み出されて人気を博し、港は大いに活気づいた。

北前船寄港地の一つ、下津井は物資の一大集散地として栄え、作物に加え、塩田で生産される塩も北前船の帰り荷として喜ばれた。当時の繁栄は、現在も残る町並みや祇園神社の玉垣、民謡「下津井節」などからも伺える。もう一つの寄港地「玉島」は、200棟超の土蔵が軒を連ねる、瀬戸内海有数の商港に発展した。羽黒神社には、函館や秋田の船主から寄進された玉垣も残る。商談や接待の場で茶の湯が好まれたことから、茶の湯文化が現在も継承されている。

明治政府が民間綿紡績業の育成・奨励に注力し、全国9カ所に初期の本格的な民間紡績所が造られたが、うち二つは児島の下村紡績所、玉島の玉島紡績所だった。少し遅れて倉敷にも、イギリス式の最新鋭の設備を備えた倉敷紡績所（現クラボウ）が建てられた。同紡績所の2代目社長・大原孫三郎氏は、日本最初の西洋美術中心の私立美術館である大原美術館を建設し、長男の大原總一郎氏は米蔵を民藝館や考古館に改装するなど、文化事業や社会事業にも尽力した。孫三郎氏は「従業員の幸福なくして事業の繁栄はなし」との理念のもと、従業員のための分散寄宿舎を整備し、工場内に学校を設置して基礎教育、情操教育を実施し、労働科学研究所や病院を設立するなど、従業員の労働環境向上に取り組み続けた。

先人たちが守った美しい町並みを残すべく、当市は1968年に倉敷市伝統美観保存条例を制定。旧倉敷紡績所の本社工場跡を再生し、ホテルなどの複合観光施設に改修した倉敷アイビースクエアが74年に開業し、79年には倉敷川周辺が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、全国有数の観光地となった。倉敷の歴史と文化、産業の発展は、北前船の広域連携によるもの。この絆を、今後の日本の発展と世界の交流にもぜひつなげていきたい。

岡山商工会議所会頭
松田 久 氏

日本遺産認定を目指して 岡山市・西大寺と北前船

岡山市西大寺は、高梁川、旭川、吉井川が流れ込むエリアの東部にあり、吉井川の高瀬舟により美作地域との物資が流通する河港と、瀬戸内海沿岸のほか全国各地の荷物が集散する内海の港町という二つの側面を持つ、水上交通の中継地として発展した。木造の日本家屋にコンクリートやモルタルで洋風の意匠を施した、看板建築と呼ばれる建物が並ぶ西大寺五福通りの街並みがあり、映画の撮影等でも使用される。

高野山真言宗別格本山金陵山西大寺（観音院）の門前町として発達し、古くから人々の厚い信仰を集めている観音院境内に開かれた市場から発達した商業の町でもある。備前金陵山西大寺会陽之図の右下に北前船らしき部分があり、西大寺観音院に所蔵されている絵図にも北前船の伝馬舟と思われる絵がある。先の会陽之図には、「丹後・田辺」「長州・下ノ関」「若狭・早瀬」など、全国各地の旗印を掲げる船も描かれている。吉井川の流域に「九蟠港常夜燈」「金岡湊常夜燈」「河本町常夜燈」などの常夜燈群がいまだに残る点でも、当時の水運の活況を感じることができる。

明治13年の山陽新報（現山陽新聞）では、「兵庫随一の廻船問屋・北風家が会陽祝主を務め、宿に泊まった」という一節があるが、この宿も観音院の絵図の左端に描かれている。西大寺に関するさまざまな文献にも北海道からの積み荷の記述が見られ、北海道江差や山形県酒田沖、秋田県土崎湊などの御客船帳も多く残されている。西大寺の郷土料理「コチめし」をはじめ、吉井川の高瀬舟よる舟運で、西大寺港湾区域を含む多くの地域から、昆布ダシやこれにまつわる各種料理があがっており、北前船の寄港に由来する食習俗が岡山に広く定着したことが分かる。

西大寺には多くの北前船が数多く寄港し、水上交通の要地だったことの証左がたくさんある。西大寺は日本遺産としてふさわしい場所だと考えている。

あいさつ

コロナ下でも、北前船ゆかりの各地の皆さまに観光庁事業を活用していただき、人流を促してもらえた。ニシン、塩、こんぶなど物資の輸送はもとより、民謡、上方芸能、食文化にも影響を与え、各地に富と繁栄をもたらした北前船は壮大な歴史絵巻であり、そのフォーラム活動には大きなロマンがある。そして、日本人の真の魅力は全国の各地域にある。北前船の物語を介して各地域間のつながりがより強くなっていくよう、観光庁としても全力を尽くしたい。（観光庁・髙橋一郎長官）

浅見茂専務理事に聞く 北前船交流拡大機構の現在、今後の展望

浅見専務

――どのような考えのもと、地域活性化に取り組んでいるか。

日本遺産「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」は全49の市町村で構成されるが、北前船寄港地があった自治体だけの参画ではない。各自治体が海や山を有し、高齢化社会や人口減少を含め多くの共通課題を抱える。われわれは、その課題解決や地域活性化に向け、自治体が連携した取り組みを実施できる流れ、環境を整備している。

――地域連携研究所に参画する市町村は49あるが、どこまで広がるか。

北前船寄港地の日本遺産への登録は2017年4月に認定され、4年間の歳月を経て48自治体となった。昨年8月には岡山県備前市も追加認定し、現在は49自治体。今後は3自治体の参画も検討中。北前船の寄港地は約300あり、地域間連携の輪を広げていきたい。

――北前船交流拡大機構と地域連携研究所の役割は。

北前船がベースにあり、後から地域連携研究所ができた。日本全体に活力を波及するには、われわれは北前船の冠を最大限に生かし、活動の幅をさらに広げる必要がある。二つの組織が両輪として動くことで加速度的に地域間交流が広がる。

――課題は。

〝稼ぐ観光〟でなければならない。経済が回るきっかけとして北前船の活動があるが、稼ぐ観光を実現するには、自治体だけでなく多くの民間も巻き込んでいかなければならない。これを促進させることが課題だ。

――日本で観光に携わる人たちに向けて一言。

いまだ経済が疲弊している日本。今後は観光でしか食べられない現状がある。地域創生の原点は、地域の誇りにあり、日本には強い地域愛がある。これを発展させ、誇りを持つことでシビックプライドとなる。北前船の取り組みの活動域は中国・大連、そして、フランス・パリにまで至った。江戸時代中期から明治30年代にかけて北海道と大阪を結ぶ経済動脈として結んだ北前船だが、200年前の先祖からその文化を受け継いでいるわれわれが、100年先の子どもたちにどうつなげるか。シビックプライドを持つ多くの人が集まり、今後の日本の国をどうするかを一緒に考えていきたい。

写真で振り返る２日間

～５日前夜祭、６日レセプションの様子から～

IPU環太平洋大学ダンス部は華麗なダンスを披露

吉備楽十六日会による演奏

５日の前夜祭の開会前には、北前船にちなんで「昆布カット」が執り行われた

会場では岡山の地酒も振る舞われた

次回開催地、北海道釧路市・釧路町関係者が最後にあいさつ

伊原木隆太岡山県知事は、5日の前夜祭、6日のフォーラムで岡山の魅力を熱心にPR

ペニンシュラ応援大使としてあいさつする女優の黒谷友香氏

駐日欧州連合代表部大使のジャン・エリック・パケ氏（上）や、アルザス・欧州日本学研究所所長（フランス元文化相）のカトリーヌ・トロットマン氏など、外国からの要人が多数列席した

前夜祭の会場の様子